



平兵衛は
過去を
夢見る4

HIRA-HEISHI WA
KAKO WO YUMEMIRU

丘野優

Yu Okano

ローゼンハイム・ナコルル

前世における大英雄の一人で、現在は魔法学院の学院長。本来は匠種だが、公の場では貴種の姿をとる。

モルブス
もの病みのニコ

人ならざる少女。瀕死になったケルケイロの前に現れて契約を交わす。

ファレーナ

闇の気配を漂わせた、人ならざる美少女。前世からの因縁でジョンに力を貸す。

メルロ

ジョンの前世における親友。冗談を好む青年。

ヒルティス

東方からやってきた者を祖とする一族の一員。ジョンとは前世で親友だった。

ケルケイロ・マルキオーニ・フィクス

公爵家の長男。前世ではジョンの親友で、魔族に殺された。

ジョン・セリアス

本作の主人公。勇者が魔王を討伐した直後に死亡、なぜか赤ん坊から人生をやり直すことに。

第1話 朋友の夢

「……？」

深い水底にいるかのような微睡まどろみの中、俺はふと、ゴトゴトとした揺れを背中に感じた。

何が起きたのかと首を傾げつつも、俺は意識を覚醒させようと濡ぬみみたいな眠気を振り払っていく。普段ならばずっと目覚めるはずの意識だが、今回ばかりはそうでもないらしい。

いくら起きあがろうと努力しても、ぼんやりとした感覚が消えることはなく、それは横合いから声をかけられるまで続いた。

「……ねえ、ジョン。そろそろだ。起きなよ」

そう、声だ。

誰の声だろう？

ひどく懐かしい気がする……

そう思うと同時に、まるでぼたりぼたりと天井から落ちる水から瞬間的に氷柱つららが形成されるかのごとく急激に心が尖とがり、まとまっていく感覚がした。

この声は、あいつだ。

「……メルロ!?」

ぱっと思い切り体を起こし、瞳をカッと開くと、そこには確かに懐かしい顔があった。

人の良さそうな柔らかな顔で苦笑する、ぱっと見、十八くらいに見えるその青年は、俺を見ながら静かな落ち着いた声で言った。

「何、藪やぶから棒に。僕の顔がそんなに珍しいの?」

彼にしてみれば、その言葉は冗談だったのだろう。

——いつも会っているというのに、どうしてそんな驚いたような顔で自分の顔を見つめているのだ。

——何か俺に変わったことでもあったのか?

——まあ、何もないとも思うけどな。

そんな風に言いたげな、ちよっとしたからかいの感情が透けて見える。

しかし、現実には俺にとつて彼を見ることなどしばらくはなくなかったことで、「何も変わっていない」ということこそが驚きに値するのだ。

なぜなら、彼は、もう……

そこまで考えて、俺ははっとする。

ああ、そうか……

ここは……

「夢か……」

ぼそり、と呟いた俺の声に、メルロは可笑しげに笑った。

「……へえ? 何か怖い夢でも見たつてことかな? あはは、きみ、その歳になつてそんなもので飛び起きないでよ。きみたちも何とか言つてやつてよ……ヒルティス、ケルケイロ」

そう言つて、俺のちょうど後ろ辺りを見つめた。

ここは夢なのだ。

誰がどんな姿で存在していてもおかしくないのだが、しかし俺はそれでも振り返るのを一瞬躊躇ちよする。

そちらを見れば泣いてしまふような、そんな気がしたからだ。

けれど、彼らに会いたいという欲望には抗あい、ようがなく、俺はやがてゆっくりと振り返った。

そこにいたのは、すっかりと成長しきつたケルケイロと、表情のまるで動かない無口そうな男、ヒルティスであった。

「怖い夢つてあれか? 小隊長殿にひたすらしごかれるとか、そういうのだから。俺だつて未だに夢に見るぜ……吐き気がするほど組手をさせられた後に、ぶつ倒れるまで走らされるとかな。勘弁してほしいぜ……」

「……いや、それなら、疲れるだけだ。ジョンはそんなことを悪夢として見ないだろう。何せ、

ジョンは根性がある。特別な才能はないが、ああいうしごきに一番強いのはジョンだ。むしろ最近では、嬉々としてやっている節（せう）すらある……」

「うげ。マジかよ。ジョン……さすがにそいつは趣味が悪いぞ？」

ケルケイロとヒルティスの至って真面目そうな会話である。

しかし、どこか滑稽なのは実際に真剣なのではなく、あくまでただの冗談の言い合いだからだ。

俺だって、過去を思い返せば、軍での訓練をそこまで楽しくやった記憶などない。

弱音を吐かないように努力はしたが、せいぜいその程度。嬉々として、などとは冗談でもあり得

ない話だった。

それにしても、なんて懐かしい光景なのだろうか。

俺たちはこうやって、いつも馬鹿なことを言い合いながら、訓練をし、任務をこなして毎日を過ごしていた。

初めは貴族であるケルケイロに対して敬語を使っていたメルロとヒルティスだが、何度か任務と共にしてケルケイロの性格を知っていくにつれ、徐々に口調もくだけていったような記憶がある。

それでも、二人は俺とは違って人前では取り繕うくらいのことではしていたが、こうやって四人しかないときにはこんな気軽な感じで話した。

今にして思うなら、この関係こそ、「親友」と呼ぶべきものだったのだろう。

俺たちは軍の中でもよくチームを組まされていた。だから仲良くなったのか、それとも仲が良い

からよく組まされたのかは分からないが、それはさておき。

まあ、これが夢だというのなら、それはそれでいい。

懐かしい思い出に身を浸すのもたまにはいいだろうと、俺は頭を切り替える。

そして、彼らに尋ねた。

「そういや、俺たちは今どこに向かっているんだ？　ここ、馬車の幌（ぼろ）の中だよな？」

そんな俺の質問に他の三人は怪訝そうな顔になり、先ほどとは打って変わって真剣な目で俺を見つめた。

メルロが口を開く。

「……ねえ、ジョン。きみ、本当に大丈夫？　悪夢を見て……何かおかしくなったんじゃないの？　調子が悪いなら、遠慮せずそう言いなよ……」

心からの心配の情がこもっている台詞（せりふ）だった。

悪夢は夢神パピヨナからの贈り物と言われ、むしろ縁起のいいものとされている。

それは、悪い夢を見ることによって体に染み着いた邪気が払われるから、らしい。

悪夢は、パピヨナに払われそうになっている邪気が一つのところに集まり、最後の最後に見せる断末魔のようなものだというのだ。

それが本当かどうかはともかく、悪夢を見た後、しばらくすると妙にすっきりした気分になっていることは少なくない。

ただ、メルロの心配は、悪夢についてのもう一つの迷信に由来している。それは、悪夢に負ける者が稀にいる、ということだ。

普通なら縁起物とされる悪夢だが、ひどく気が弱つているときに悪夢を見るとそのまま夢に取り込まれ、最後には衰弱して死んでしまうのだ。

しかし、これもまた、ただの迷信である。

何の裏付けもない話で、当然のことながら、俺がそんなものに負けることなどあり得ない。

強いて言うなら、今の状況——もしくはここでこれから起ることが、俺にとつての本当の悪夢なのかもしれない、というくらいだろうか。

いくら何でも皮肉が過ぎるか、と首を振り、俺はメルロたちに言った。

「いや……大丈夫さ。別に頭がおかしくなつたわけじゃなくて、もう一度聞いておきたいと思つただけだ。何せ、この四人で組むときは大抵が面倒なことになるもんだから……しつかりと確認しておいたほうが安心だろうか？」

これは、事実だ。

かつてこの四人で組んで何かしらの訓練や任務を課されたとき、それが楽に終わったことはなかった。

別に俺たちが無能だというわけではなく、星の巡り合わせが悪いのか、きつちりと仕事をこなしているにもかかわらず、なぜかすべてが悪いほうに転がったりするのである。

だから大変な目に遭うことが少なくないのだが、最終的な着地点は不思議と悪くないことが多い。周囲からは、他の誰がこなしてもこれ以上の結果を得るのは難しかっただろう——つまりは上々だと評価されるため、何かトラブルが起こりそうであっても、俺たちは何度もチームを組まされることになつていた。

腐れ縁に近いかもしれないが、それを愛してもいた。

だから、やはりこの頃は楽しかった、と思う。

「不吉なこと言うね、きみも……ただ、それは正しい見解だ。いつだって何か起こるもんね……僕らが組むとき。だから、もう一度目的をしつかり確認しておくのはいいことだね」

メルロが頷く。

「つつても、大して確認すべきことはないけどな。これから俺たちが向かう場所は『ニグラ大尖塔』だぞ。東部では比較的有名な迷宮の一つだから、情報も結構多い……普通なら集めるのに苦労するような情報も俺たちは軍からしつかり教えられてるしな」

ケルケイロがそう答えた。

迷宮『ニグラ大尖塔』という響きには覚えがある。

確かに過去、この四人で行つた。

記憶を辿つて今がどんな時期だったかを思い出すと、おそらくこの夢の時間軸は戦争が起こる直前くらいだろう。

まだ魔族が現れる前の、平和な時期のはずだ……

事実、色々と話す雑談の中に出てくる話題は、大抵がそのことを裏付けるようなものばかりだった。

「今回も訓練の一環ってやつだね。この平和な時代に実戦なんかできる場所は迷宮ダンジョンくらいしかないから。命の取り合いに慣れとけてことだろう。物資の管理とか細かいことも考えないと奥まではいけないし、しっかりとこのかさばるのを持たされてるから、どこまで行ったのかは記録に残るしさ。どうしても、手を抜くわけにはいかないねえ」

メルロがポケットから手のひら大のオーブを取り出して言った。

そのオーブは迷宮ダンジョン内部での位置を記録する魔導具であり、そのデータを改変するのは至難の業という代物である。

軍での訓練は、王都の拠点においてのものと、今回のような遠征とに大別される。さらに遠征は、大勢で行うものと、時期や場所ごとにチームを分けて行うものがあった。

今回は、少数での遠征訓練ということなのだろう。

教官などはついてこないのだが、代わりにオーブに全て記録される。

後で教官がチェックするのは確定的なわけで、メルロの言う通り、適当なことではできない。

「……ジョンは手を抜かない。心配なのはメルロとケルケイロだ。油断するな」
ぼそり、とヒルティスが言った。

この四人の中で、もつとも真面目なのがこのヒルティスだろう。

東方からやってきた者を祖とする一族の一員で、独特の技を修めている男である。

言葉少なで、しかし何事にも真剣に取り組む一本気なこの男の言葉は、チームの中で最も重みがある。

そんな彼に、へらへらとした様子でケルケイロが答える。

「分かっているって。でも、危なくなったら俺はお前等を盾にするぜ？ 何せ、大貴族様だからな、俺は」

そしてメルロも皮肉げな笑みを浮かべて言った。

「えー？ 僕は真面目に取り組むほうだけだなあ。まあ、危なくなったらみんなを置いて一目散に逃げるけどね」

そんな二人を見て、ヒルティスはふつと笑う。

「そんなことを言いつつ、いざとなったならそれこそ嬉々として殿しんがを引き受けそうなお前たちが、俺は一番心配だ……いっそ、本当にさっきの言葉通りにしてくれるとありがたいな」

そう言われて、メルロもケルケイロも一瞬絶句した。

ヒルティスは誰よりも人を見て、理解している男でもあるのだ。

本当に危なくなったら、この二人は確かに俺たちを逃がそうと殿しんがを買って出そうだ。

自分の命を大切にしていない、とまでは言わないが、自分と友の命を天秤にかければ、間違いな

く秤は友の命に傾いてしまう。

そういう天秤を、二人は心に持っている。
得難い仲間だ。

メルロとケルケイロは顔を見合わせた。

「……ヒルティスは、たまにこういうことを言うから気を抜けないね。普段黙ってることが多いから、困っちゃうよ……」

「全くだ……だがなあ、ヒルティス。それはお前にも言えることだぞ。俺には見えるぜ……大量の魔物が襲いかかってくる中、刀構えながら振り返って一言『……行け』とか言っつて、俺たちを逃がそうとする絵がよ。人に言う前に、お前もそういうことはするなよな？」

ケルケイロが鋭いことを言うと、ヒルティスは苦笑した。

「……俺はいいんだ」

「ぜんぜん良くないだろう……」

俺が横からつつこむと、すかさずヒルティスに言い返される。

「ジョンも似たようなことしそうだが……それ以上に、ジョンはそういうとき、運良く生き残りそうな雰囲気があるな。妙な悪運がお前にはある。後は任せたぞ、ジョン」

冗談混じりに言われたものだから、何と返していいものか俺は迷う。

そして、色々考えてみたが、出てきた言葉はあまり面白くないものだった。

「……俺は、もしもお前等が俺を置いていったら、怒るぞ」

「怒ってどうするのさ？ その時にはもう僕たちはいないのに」

メルロの声がなぜか、ひどく響いて聞こえた。

そして、俺は一体どうするのだろうと思った。

ど・う・し・て・い・る・の・だ・ろ・う、と。

彼らがいなくなった後の世界で、彼らのことを思い出しながら。

いや、違う。彼らは、まだいるのだ。

ただ、これから先、どうなるかまだ決まっていなだけで。

だから、そうだ。何をするかなんて、決まっている。

「お前等に俺を置いていかせたりしないさ……絶対、な」

そう言っつて、俺は笑った。

第2話 出会い

「……痛ッ!？」

鋭い痛みが脇腹に走り、俺——ケルケイロ・マルキオーニ・フィニクスの意識は覚醒した。

痛みと身体の重さのあまり、うつぶせの状態のまま、そこから起き上がることはもちろん、体勢を変えることさえできなかった。

それでも何とか急いで自分の痛みの発生している部分を確認してみれば、それは身体の一部だけではなく、身体中の至る所にあるのだと理解できた。

どうやら右足は折れているようだし、左手の指の骨もいくつかいつている。

左手はジョンの持っていたアクセサリーを握った形で固まっていて、動かない。

腹部の奥から感じる鈍痛は……何だ、内臓にでも問題があるのかもしれない。

俺は医者でも治療師でもないから、詳しいことはよく分からないが、これは致命傷というやつなのではないだろうかと直感するくらいの激痛である。

やばい、死ぬ、と冗談でなく思ったのは、短い人生とはいえ初めてのことだ。

むしろ、今どうして俺が生きているのか奇妙なことこの上ないが、そんなことは今言っても仕方がないだろう。

そもそも、俺は一体どうしてこんな怪我をしてるんだ……？

ぼんやりとした頭で考えてみる。

痛みで考えがまとまらないが、しかし、その瞬間脳裏に過つたのは迫りくる竜の威圧感と、その口から放たれた吐息の威力だった。

「……そうか、そうだった……俺とジョンは……げほっ」

ぶつぶつ声を出しただけで、口から血が漏れた。

これはやばい。

しかし、どうしようもない。

それに……そつだ。

俺はともかく、ジョンはどうした。

あいつは竜の吐息を防ぐべく、結界に全魔力を注いで気絶したはずだ。

それを俺が抱えて逃げようとしたら……地面が崩れた。

俺はジョンを庇って抱いて、そのまま落ちて……

きよろきよろと眼だけを動かして、ジョンのことを探しながら、状況を頭の中で整理していく。我ながら、今の身体の状態がよくこんなことができるものだと感じながら。

俺はそれほど痛みに強いほうというわけではないが、どうもこつこつときは頭が冴える性質らしい。

どくどくと失われていく血液や、身体の深いところを針で貫かれているような鈍痛も、なぜかひどく遠くのどこかで、誰か見知らぬ人の身に起こっている凄惨な出来事みたいに感じられた。

紛うことなく自分の身体に起こっていることだというのに、だ。

このような状況にあっても意識を痛みにとらわれることなく、やるべきことをやるタイプらしい、と俺はこのとき初めて知った。

そうして、俺はジョンを見つける。
何のことはない。

すぐ近くに、俺と同じように倒れていただけだった。

五メートルも離れていない距離にいたのだが、歩くことすらままならない俺にとっては魔の森を一キロ歩くよりも遠く感じられる。

体をずりずりと引きずりながら進んで、やっと辿り着いた。

横たわっているジョンに怪我がないか、俺と同じようなことになっていないか丹念に確認するが、どうやら何の問題もないように見える。

細かい擦過傷はいくつかあるようだが、せいぜい傷と言ったらそれくらいで、俺みたいに体の至る所から血が漏れ出ているということもなさそうだ。

もちろん、見えない部分に重大な傷があることも考えられるため、俺にしてもジョンにしても、早いところ魔の森の砦に戻って身体を詳しく診てもらう必要があるだろう。

とはいえ、ひとまずは安心である。

「いや……安心なのはジョンだけか。俺はこのまんまじゃ死ぬな……」

よくよく考えてみて、ため息が出た。

口にする、深刻さがひしひしと身に染みしてくる。

当たり前だが、こんなところで死ぬわけにはいかないのだ。

ジョンの身体には、一応傷はない。だから、彼が目を覚ましたら、助けを呼んでくるなり何なりしてもらえそうだ。

俺はあまり力の入らない腕を上げてジョンの身体をゆすってみたが、起きる気配はなかった。

魔力枯渇の影響か、それともやはり何らかの致命傷を負っているのか。

それは分からない。

ただ、間違いなく、俺にとって状況が詰んでいることだけは分かる。

「……そもそも、ここはどこだよ……魔の森の地下だよな？　なんで地下にこんなところが……」

魔の森の地盤が崩れたのだから、その地下なのは分かっているが、それにしても開けた空間だった。

見上げてみると、はるか高いところに穴が見える。

たぶん、あそこから落ちたのだろう。高すぎて、人の身では登ることはできなさそうだ。

ただでさえ無理なのに、この身体である。余計に不可能と言っほかない。

ジョンが起きて、魔力さえどうにかできれば登れる可能性もあるのかもしれないが……いや、しかし登ってあそこから出たところで、竜が首を長くして待っているのではないだろうか？

あれから竜がどうしたのかは分からないが、あの穴の辺りを徘徊していてもおかしくない。

そう考えると、あそこから出るという選択肢は、あまり気が進まなかった。

「じゃあ、どうするってんだ……？」

考えながら、ため息をもう一度吐いた。

本当にどうしようもない。

このまま緩慢に死を迎えるしかないのだろうか。

そんな気がしてきた。

いや、仮に俺が死ぬとしても、ジョンには生き残ってもらいたい。

せつかく無傷で済んだんだ。

このまま生きて帰ってもらわなければ、俺としては困る。

しかし、どうするのか——やはり問いはそこに戻ってくる。そして「どうにもならない」という結論だけが頭の中に浮かんでくるのだ。

だとしても、諦めるわけにはいかない。

諦めるなど、ジョンも言っていたのだから。

それに、考えようによっては、竜と正面からやりあっていった時と比べれば即座に死ぬ危険がないだけ、まだ状況はましというものかもしれない。

何か、何か手が……

そう思って辺りを見回すと、ふと、場違いなものがそこにあることに気づいた。

ここは魔の森の地下。

そんなところにある空洞なのだから、水の流れなどが作り出した自然の洞窟か何かなのだろうと、

無意識に予測を立てていた。

けれど、そこにあったものは、そんな俺の想像を見事なまでに蹴散らした。

「……あれは、おい、何であんなものが……扉、か？」

そう、そこにあつたのは間違いない扉であつた。

明確に人工物と分かる装飾が施された、両開きの半楕円形の扉。

ぼつりと壁に張り付いていて、悪い冗談のようにすら感じられた。

ここは魔の森の地下なのだ。

扉がある、というのはどう考えてもおかしい。

ここ魔の森は、歴史で伝えられている事実として、危険さゆえに人の手は入ったことがないはずなのだから。

いや、しかしこれが俺の幻覚でないとするならば、実際に扉はそこに存在しているのだ。

誰かが作り、ここに配置したと考えるほかない。

誰が、いつ、何のために？

疑問が次々に湧き出てくる。

歴史がこの森について何も語っていないということは、あの扉が作られたのは既知の時代より過去ということになるのだろうか、そんなことが可能な文明が遙か昔に存在していたというのだろうか。

それとも、魔の森があるこの土地は、その時代にはもっと平和な、人が手を入れやすい土地だったということか。

答えは出ない。

しかし、扉があるということは、あそこから魔の森の外に出られるかもしれない。

もちろん、何かの入り口という可能性もあるが、今ここでじっとしているよりは余程マシな気がする。

そう考えることは、何も希望的観測に過ぎないと切り捨てるものではないだろう。

扉はここに入るため、あるいはここから出るために存在するものなのだから。

俺は見つけた希望に向かって、体を引きずった。

それほど遠くはない。十メートルほどの距離だ。

歩けば十数歩で辿り着く。

しかし、今の俺にとってそれは大陸を端から端まで一日で歩いてみると言われているかのような、

絶望を感じさせる距離であった。

無理難題であると叫びたくなるくらいに遠いのだ。

身体中に痛みが走り、血が噴き出て、骨が折れて動かない部分も多い。

そんな状態で、どうやってあそこまで辿り着けるといえるのか。

だが、それでも俺は辿り着かなければならない。

確かにあの向こうに道が続いていると、この目で確認しなければならないのだ。

そのために、俺は体を引きずりながら進んだ。

「……友達、なんだ……」

ずりずりと這いずりながら、俺はつづやく。

「貴族じゃなくて……平民の……」

一歩分、進むごとに血が土の地面に染み出す。

「そんなものができるなんて、考えたこともなかったが……」

大抵、恐れられるか、ひどく敬われるかのどちらかだった。

「できたんだ……俺にも。それに、他にもたくさん……」

ジョンの友人の魔法学院生たち。

今は俺の友人でもある。

だから、俺はジョンを助けなければならない。

俺は助けられたのだから。

友達である、ジョンに。

俺も、友達であるジョンを、助けなければ。

そして、俺たちの友人のもとに、帰るのだ。

……できることなら、二人で。

心の底から、そう思った。

「はあっ……はあ……」

そして、俺は扉の前に辿り着いた。

おそろく時間にすればそれほど長くはなかっただろう。

けれど、それは俺には永劫にも等しい時間に感じられた。

「……開いてくれ」

かなりの長い期間、放置されていただろうことは間違いない扉。

錆びついて開かない可能性も十分にある。

そもそも扉の向こう側の壁が崩落して封鎖されてしまっているとか、そういうことも考えられるだろう。

俺は祈るように扉に絶り付いて、片足の激痛に耐えながら立ち上がる。

何とか立てなくもなかったが、しかし大して力が入らない。

そもそもこんな状態の俺に扉を開けることができるのか。

こんな重そうな扉が。

近くで見ても分かったのだが、その扉は金属製の重厚なもので、ある程度の力を込めなければ開きそうもなかった。

しかし、できないなんて言えない。

やらなければならないのだ。

「頼む、開いてくれ……」

俺はそっと扉に手を添え、そしてゆっくりと押し始める。

一度に力を入れると、身体の傷が痛み、血も噴き出してしまう。

だからこそこの慎重な力の入れ方だったが、どうもそれでは扉は開いてくれないらしい。

「は、ははっ……くそ……頼む……」

痛みに耐え、自らの身体から血が流れ出るのも諦めて、俺は懸命に力を入れる。

重厚な岩の扉くらいなら開くであろうほどの力を。

けれど、現実是非情らしい。

「……あ、開かねえ……くそ……ッ……」

扉はびくともしなかった。

やはり、壊れているのかもしれないし、何らかの理由によって封鎖されているのかもしれない。それでも俺は力を入れ続けるが、どうやっても開かなかった。



どれくらい力を入れ続けただろうか。

意識が朦朧もろうとうとして、感覚も鈍くなっていった。

手に入る力もどんどん弱くなっていき、そしてついには、自分の体を支えることもできなくなっ
てしまった。

限界、というやつだ。

「げほっ……くそ……くそ……!!」

扉に預けていた身体がすり下がっていき、頭が地面にがつりとぶつかる。

起き上がろうとするが、もう指一本すら動かない。

いや、指を動かそうとしても、左手の指はだいたい折れているのだが。

右手を先ほど動かさせていたのも、ほとんど奇跡だったのかもしれない。

はつきりとは折れていなくても、ひびくらは入っていた可能性はあるのだ。

痛みは……あまりにも身体中に傷を負いすぎて、麻痺まひしているのかもしれない。

どうせなら扉が開くまで俺の言うことを聞いてくれ、と自分の身体に文句を言いたくなくなったが、

それこそ言っても仕方ないことだ。

もう、すべては決した。

どうにもならない。

諦めるしか、ない。

諦めるしか……

心が死んでいくのを感じた。

深い地の底で、こんな風に死ぬのが俺の人生の終わりなのかと、虚無感を抱いた。

同時に、それもいかもしれないという、解放感も。

そうして黙って白む視界を見つめていると、体の奥深いところから、何かが呼びかけてくるよう
な気がした。

——お前は、それでいいのか。

そして、その呼びかけが新たな火種となって、感情が爆発したように頭の中を駆け巡った。

「いいはずが……ねえ……!!　こんなんで……いいはずが……ッ……いいはずがねえんだ

よ……!!」

そっだ。

俺はまだ、何もしていないのだ。

ここに来た目的も果たしていないし、これだけ大きな傷を負った意味すら今や無に帰そうとして
いる。

そんなのは、認められなかった。

立ち上がるべく、俺はもう一度意識を覚醒させる。

辺りが赤く見えた。

怒りなのか、興奮なのか、それともそれ以外の何かなのかは分からなかったが、そういう何らか

の感情が、俺を立ち上がらせる——そう思った。

だが——

「……起きろ……起きろ、ケルケイロ……！早く、起き上がって……動け……」

喉は動くのだが、身体はやはり何も言うことを聞かない。

これでもダメなのか。

これだけ、力を入れても、心を燃やしても。

何の意味もないのか。

絶望感が、腹の底を深く覆った。

そして、怒りと悲しみと無念と絶望がないまぜになり、ばらばらになりそうな感情の渦が俺の心の中に満ち満ちた瞬間、それは起こった。

放したくても放しようがなかったジョンのアクセサリーが、妙な輝きを放ったのだ。

それは徐々に大きくなり、辺りを光で覆っていく。

「こいつは……なんだ……？」

朦朧とした意識の中でも、その光は美しいと感じた。

死に際に見るにしては悪くない光景だ。

そして光が収まったとき、そこに存在していたのは、妙な少女だった。

ぼんやりとした、夢を見るような薄茶色の瞳を持った少女。

少し寝ぐせついていたのようにも見えるアイスブルーのショートの髪が艶やかであった。

総じて幼くも美しい少女であったが、それだけになぜこんなところにいるのか。

そもそも、これはどういうことだ。

どうして、あの少女は空中に浮いている？

「……こんにちは、は……」

場違いな、挨拶だった。

しかし、俺はそれに返してしまっ。

その選択が必ずしも正しいものではなかったと、ほんの少し後に後悔することになるなどとは知らずに。

「あ、ああ……こんな姿で悪い、が……はじめまして……お嬢、さん……」

声がかすれてひどいものだが、出た言葉は貴族として身に着けた貴婦人に対するものだった。

そんな俺の台詞に少女は言う。

「……あなた、やっぱり……おも、しろい……」

そして、口元を大きく、夜に浮かんだ三日月のような形に妖しく曲げたのだった。

第3話 不公平な契約

「……面白い？ は、ははっ……なるほど、いい趣味をしてるらしいな、お嬢さん……確かに、おも、しろいかも、な……」

客観的に見れば、俺のこの状況は笑えるかもしれないと思つての言葉だった。

友人の危機を一応回避したはいいが、その結果として自分は死にかけているし、肝心の助けた相手も意識不明で、さらには脱出方法が見当たらないときた。

出入り口かもしれない扉は見つけたが、それも開かない。

八方塞がりのこの状態、笑う以外にどうしろというのだ。

しかし、俺の目の前に浮いている眠そうな腫の少女は、何もそんな突き抜けた皮肉を口にしたりわけではなかったようだ。

細い首を少し傾げて、彼女は言う。

「……死んだ人は、いっばい、いた……でも、あなたは、ちがう……」

口を開いた当初から、随分と言葉足らずな少女だと思つていたが、その感覚は間違つていなかったらしい。

少女の返答を聞き、俺は悩んだ。

死んだ人がいっばいいいた？

俺は違う？

どっという意味だ。

だが、そんな風に考える俺の表情を見てか、少女は周りをきよるきよると窺い、それから一点を凝視する。

その視線の方向に何か意味があるようだと思つて、彼女の視線の先を見てみると、そこにあつたのは累々と積み重なつた骸骨だった。

「……なるほど、ここに落ちて死んだ奴は俺の他にもいるって？ きつい冗談だな……」

このままでいれば、いずれ自分もあなるのは確実である。

いや、でも……

少女は、言った。

俺は、違つ、と。

「……俺はあならないって？ そう言いたいのか、君は……」

俺のかすれた声に、少女は微笑みながら頷く。

「……そう。あなたは、死なない……骸骨にはなら、ない……」

「そりゃ……また、面白い冗談だな……この状態で、どうしてそんなことが言えるんだ……」